

## SACOMしてありますか？——限定形容詞の配列順序

阪神大震災(阪神・淡路大震災、1995 年 1 月)から16年経った 2011 年 3 月、日本はまたもや巨大地震——東日本大震災——に襲われてしまいました。その余震を含めその後も地震は頻発し、常に地震への警戒を怠ってはならないこと(We must take precautions against earthquakes)を思い知らされます。ところでこの「阪神大震災」「東日本大震災」という名称、英語ではいろいろな表現が用いられていますが、英語のウィキペディア(Wikipedia)の見出し・本文には“the Great East Japan Earthquake” “the Great Hanshin Earthquake”という表現が見られます(前者はアメリカ国務省の HP でも用いられています(<http://www.state.gov/secretary/rm/2012/03/185537.htm>))。これらの表現は日本語に直訳すると「大東日本震災／地震」「大阪神震災／地震」となり、通常の日本語の名称とはことばの並べ方が異なっています。すなわち日本語では「東日本」「阪神」という地域名が先に来て「大」という規模を示すことばが後に来ていますが、英語は逆の順序になっています。英語の表現において great と East Japan／Hanshin はともに後続の earthquake という名詞を修飾している要素ですが、英語ではこのような名詞修飾の形容詞(限定形容詞)の配列の順序に一定の傾向があることが知られています。

英語の形容詞は「主観的評価を表す形容詞」と「客観的事実を表す形容詞」に大別されます。たとえば次の表現において、それぞれ一番目に置かれている形容詞(nice, beautiful)は「主観的評価」を表すものであり、二番目以降に置かれている形容詞(new, large, round, wooden)は「客観的事実」を表すものです：

- (1) a nice new house, a beautiful large round wooden table (Murphy 2004: 198)

この例からわかるように、同じ一つの名詞を「主観形容詞」と「客観形容詞」が修飾する場合は、一般に「主観形容詞」のほうが先に置かれます。次の例も同様です：

- (2) delicious white soup, yummy Chinese dumplings, emerging Asian nations

さらに、「客観形容詞」はいろいろな種類のものに分けられますが、同一の名詞をいくつかの客観形容詞が修飾する場合は、「大きさ(size)」+「新旧・年齢(age)」+「色(color)」+「起源・場所(origin)」+「素材・材料(material)」の順に並べるのが一般的です(Murphy 2004: 198)。次の各例を参照：

- (3) a tall young man, big blue eyes, an old Russian song, a small black plastic bag,  
an old, brown, leather briefcase (Murphy 2004: 198; Berk 1999: 180)

最初に見た the Great East Japan Earthquake, the Great Hanshin Earthquake もこの一般的な順序に従っていることがわかります。「客観形容詞」のこのような配列順序は、まとめて「SACOM」と覚えておくとよいでしょう(SACOM は意味範疇名の size, age, color, origin, material の頭文字から成る acronym (頭字語)である)。英文で表現する際に自信がなかったら、最初のうちだけ「(SECOMではなく) SACOM してありますか？」と確認していれば自然に慣れてくるでしょう。

形容詞の問題からは離れますが、一般に表現の構成のあり方に関して、二つ以上の語の並列に基づく表現の場合、英語と日本語では構成要素の慣用的な配列順序が異なるものがあります：

- (4) mother and father (父母) plants and animals (動植物) black and white (白黒)  
supply and demand (需要と供給) here and there (あちこち) back and forth (前後に)  
food, clothing and shelter (衣食住) north, south, east and west (東西南北)

これらにおいて、それぞれ「なぜその順序で言うのか」と問われると合理的な説明は必ずしも容易ではありません。洋の東西でそれぐらいの言語的相違があっても無理はないとも思われるのですが、実は一衣帯水の関係にあると言われたりもする同じ漢字文化圏の中国でも、日本語とは構成要素の配列が異なる表現がときどき見られます。たとえば中国語では“买卖(mai3mai)” “进出口(jin4chu1kou3)” (数字は声調を表す。数字のないものは轻声) はそれぞれ「商売、売買」「輸出入」を意味しますが、“买”は「買う」で“卖”は「売る」、 “进口”は「輸入」で“出口”は「輸出」なので、日本語とは順序が逆になっています。「所変われば品変わる」と言いますが、それと同時に所変わればたとえ同じ事物であってもそれを表すことばの順序が変わることがあるのです。言語の多様性は言語全般への関心の出発点になるはずです。

参考文献 Lynn M. Berk, *English Syntax: From Word to Discourse*. (Oxford UP, 1999)

Raymond Murphy, *English Grammar in Use*, 3rd ed. (Cambridge UP, 2004)